

# 東方天邪録 転生した ら天邪鬼

トイレの紙が無い時の絶望を司る神

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

普通に夜寝て、普通に起きたらいつの間にか自然豊かなどこかに寝ていた。

何を言っているのかわからねえと思うが（ry

しかも変な能力まで付けられている。いらぬのに。

周りは勘違いしているし、俺はそんなに危ない奴じゃない!!!

紫「危険な妖怪ね。」オリ主「なぜ皆俺を怖がる。」

そんな感じでやって行きたい。

※作者は紅魔郷より先は知りません。キャラ崩壊があつたりするかもしれません。いや、あります。

キャラは知っていますが能力が知らなかったり、スペルカードを知らなかったりします。

許せる人だけ見てください。

# 目次

プロローグ | 1

第1怪 天邪鬼に関する逸話 | 7

第2怪 竹林からの脱出 | 13

第3怪 犯人は現場に戻ってくる。

18

第4怪 ⑨が⑨じゃ無くなった様です。

23

第5怪 赤い屋敷と天邪鬼：前編

33

第6怪 赤い屋敷と天邪鬼：後編

40

番外編：かの天邪鬼の被害者達 | 51

第7怪 子孫 | 57

第8怪 子孫② | 63

第9怪 腹黒 | 69

第10怪 観光スポット：真つ赤な館

80

第11怪 観光スポット：太陽の花畑

86

第12怪 観光スポット：神住まう神

社 そして帰宅 | 93

第13怪 お客 | 99

第14怪 観光スポット：貧乏神社

してちよつかい | 106

第15怪 観光スポット：迷いの竹林と、

永遠亭

第16怪 穏やかな1日

118

第17怪 天邪鬼、弾幕を覚える

125

第18怪 観光スポット：キノコの森

132



# プロローグ

目が覚めたら目の前に森がいつぱい広がってた。

……なんだ!? ここ!! 俺はこんな空気の美味しい場所に居た覚えはない!!

「ここを知っている……いや、知らない。」

……なんだか喋り方がおかしいぞ。

つい何時もの癖で考え事をする時に額をカリカリと搔く癖が出た。

カリカリ……カリカリ……ん?

何か突起物の様な物が頭に生えている。

触つて見ると、角が生えていた。

鬼みたいな角が生えていた。

「これを知っている……いや、知らない。」

角が生えていた事への驚きは表情に出ず、あくまでも冷淡な口調で言う。

内心オロオロしていたが。

とにかく同じ場所にずっと居るのもあれなので歩きながら考える事にした。

まず、ここがどこかだ。周りは森で木しか無い。

とりあえず歩き出した。

「……………誰なのだー？」

「……………」

後ろを向いて歩き出したら目の前に何かが居た。

なんか浮いている何かが居た。

見たところ頭に赤いリボンを付けて両手を広げている金髪の可愛いようし、よだ。

「角があるってことは人間じゃないのかー？」

「違う……………いや、そうだ。」

とりあえずこのめんどくさい口調を直したい。

自分で言ったことを自分で否定するとか気持ち悪い奴だろ。

「怖い顔してどうしたのだー？」

「なんでもない。」

お、普通に喋ることもあるのか。

ならこの幼女にここがどこか聞こう。

「ここがどこか知っているか？」

「幻想郷なのだー」

……………は？幻想郷？



あの、女の子TUEEEEの東方シリーズの舞台になってる？

「あ、もしかして新入りなのかー？」

「…… わからない。」

「そうなのかー。なら霊夢の所に行くのだー」

霊夢と言うと確か主人公だよな。

やべえ、東方なんかほとんど知らないぞ!?

「霊夢の神社はここをまっすぐ行くのだー。私はチルノちゃんと遊ぶからもう行くのだー」

ふよふよと去っていく幼女。

とりあえず指さされた方向に進む。

しばらく歩くと神社に着いた。

もう昼になってしまった。

そういうえば、いつの間にか人間やめてたわけだが、それで強くなったりしてるのか？

…… 夢の見すぎか。恐らく弱いんだろうな。

「私は弱い…… いや、強い!!」

何言ってるんだこの口は!!

ほら、大声出すから鳥が一斉に逃げちゃっただろ!!!

「あのねえ、私の神社の前でそんな禍々しい妖気出さないでくれる？」

巫女姿のめでたような色をした十代くらいの女の子が喋りかけてきた。

確かこれが主人公の博麗霊夢だっけ？

「はあ…… 昼から面倒な奴ね!!!」

すると急に札を投げてきた。

え、主人公ってこんなに血気盛んなの!?

それに凄いスピードと数、これは直撃ですわ。

「当たる…… いや、当たらない。」

自信満々に勝手に動いた口からそんな言葉が出る。

するとお札は急に進行方向を変えて逆に主人公に向かっていった。

なんだ？もしかしてドツキリか？

「え!? 何したのよ!!」

若干焦りながら自らの攻撃を避ける主人公。

演技力高いな。ドツキリと思わせない様な演技だ。

拍手しとこう。あと賛美も忘れず。

「大した物だ、なかなか面白かったぞ。」

またしても口調が変に。

自分の体なのに上手く使えないとか笑えるな。

「っ!? こいつう!!」

ん?なんで怒ってるんだ?

あ、もしかしてドツキリだと気付かれて悔しかったのか?

「何をそんなに怒る。私はただ純粹に褒めただけではないか。」

「舐めてるの?」

また怒られた。

ドツキリだと気づかれた位でこんなにムキになる人も居るんだな。

そんな話をしていると、主人公の後ろに何か裂け目の様な物が現れた。

中には色んな目がギョロギョロ動いている。

気持ち悪い!!

中から女性が出てきた。

「あら? 見覚えのある妖気があるかと思つたら...: あなた、どうやってあの封印を解

いたのかしら?」

一瞬驚いた風な顔をしたと思つたら凄く殺気みたいなのを放ってきた。

うわあ、これだけで死にそう。

「.....」

「そう、喋る気は無いのね。」

気圧されていると何か勘違いした様だ。

いや、あの、怖くて喋れないんです。

「紫、あいつなんなの？」

「あれはね、昔に封印した天邪鬼よ。」

「天邪鬼？天邪鬼があんなに濃い妖気を出せるの？」

「あれでも鬼の端くれよ？それに、こいつの格が違うだけよ。」

なんか話し合ってるな。

もうめんどくさいから今のうちに逃げようかな……

今の所何言っても聞いてくれなさそうだしな。

あんな危なそうのが本当に飛んできても怖いし。

よし、逃げよう!!

一言言つてダツシユで逃げよう!!

「では、これにて私は失礼しよう。」

また会えると良いな。」

そう言い残して俺は猛ダツシユで逃げた。

## 第1怪 天邪鬼に関する逸話

「な、なんだったのよあいつ……。」

ちよつと紫？説明してくれるわよね？

あんたが出てくるって事はそれなりの奴なんですよ？」

霊夢がイライラした様子で聞いてくる。

「勿論よ。あれが復活したとなれば、あなたにも気を付けて欲しいから。」

「そうは言っても、所詮は天邪鬼なんですよ？」

霊夢はまだあいつの恐ろしさに気づいていない。

これはしつかり言い聞かせなければならぬ様ね。

「まあ霊夢も天邪鬼については知ってるでしょう？」

「そりゃもちろん。ついこの間、天邪鬼関連の異変を片付けたばかりですもの。」

ズル賢くて、性格もひん曲がってて、相手を利用するのに躊躇は無い、外道まっしぐ

らの下っ端妖怪。

それがどうかしたの？」

「あの天邪鬼の名前は天鬼あまぎ、天邪鬼の祖よ。」

「……え？」

「天邪鬼の祖よ」「聴き返したわけじゃないわよ!!」

おっと、少しからかっただけでこれとはね。

挑発に乗りやすいタイプかしら？

……いやそれは無いわよね。

「祖つてことは、最初に生まれた天邪鬼つてこと!？」

「正確には天邪鬼つていうのは、彼から派生した妖怪一族が一つに纏められた後に付けられた種族名で、基本はその子孫のことを指すのよ。」

おおまかな説明をするとポカンとしている霊夢。

なんだか面白い顔ね。

「彼には色々な逸話があるのよ。」

曰く、一晩で大国を5つ滅ぼしたとか。

曰く、彼には性別が無いとか。

曰く、そもそも決まった形が無いとか。

曰く、かの茨木童子を食ったとか。

曰く、地獄を一周して戻ってきたとか。

他にもあるのだけれど、信憑性があるのはこれくらいね。」

「そんな奴だったのね……。茨木童子って何よ。」

「葦香と同等かそれ以上の力を持っていたとされる伝説の鬼よ。」

「よくそんなのを封印できたわね。」

「本当に、奇跡的だったわ。」

偶然に奇跡が乗っかって来た様な物よ。

いきなり幻想郷に入ってきて、いきなり戦争を仕掛けてくるもの。怖かったわよ？」

本当に、今でも生き残れたのは奇跡的だと思える。

あの時ほどピンチになったのは月に戦争を仕掛けた時ぐらいね。

「だから霊夢も、今度会っても関わらないこと!!良いわね?」

「あつちから来たんだけど。」

これであらかた説明を終わったかしら……。 (。D。) ハッ!

まだ一つ言うことがあったわ!!

「そうそう、彼の能力を言っておくわ。」

「あんたを追い詰めた能力つてのは気になるわね。教えてちょうだい。」

「それは天邪鬼を天邪鬼として確立させたと言っても過言じゃない能力よ。」

それはね……。」

## 『拒絶する程度の能力』

あらゆる事象を拒絶し、物事を文字通りひっくり返す能力。

つまるところ、起こったことと逆のことを起こす能力。

私の能力もこれで封じ込まれた。

使用されては防ぎようのないわけで、応用性も半端ない。

なにせ、『攻撃も能力も全部自分に返ってくる』わけで、攻めれば攻めるほど不利になるのだ。

「だからあの時私の札が私に向かって来たわけね。」

「そうよ。あと、彼の姿は覚えているかしら？」

「ええ。確か背は少し高めで、髪が黒色で、人間の様な姿だったけれど、角が生えていたわ。」

「彼は自身の存在を拒絶することによって姿形、気配や妖力の質まで変えることができるの。」

「だから会ったときの姿や印象は宛にならないわ。気をつけることね。」

「本当にケタ違いね。これからは戸締りをしっかりしなきゃ。」



「戸締りでどうにか出来るなら苦労しないわよ。全く。」

幻想郷に復活した古の天邪鬼。

その逸話は数えるのも嫌になるほど残っている。

そんな天邪鬼はと言うと……………。

「ここまで来れば大丈夫か……？」

あれ、喋り方が普通だ。」

そんなことは露も知らずに能天気だった。

「もしかして、誰も居なかったら普通に喋れるのか？」

良かったがかなり不便な体だな。」

なにせ思ってもないことが口に出るのだ。

面倒極まらない。

「……ここどこだ？」

そこは、見渡す限りが竹に囲まれた、広大な『竹林』だった。

## 第2怪 竹林からの脱出

「ああ、疲れたあ。」

自然とそんな言葉が出てきた。

それもそうだ、あれからどれほど歩いたかもがわからない。

進んでも進んでも竹、竹、竹。

後ろ振り向くと全く違う風景に見える。

こういう所を抜け出るのはなかなか骨が折れるもんだ。

「まあ、進めばなんとかなるだろ。」

楽観主義の俺はこういう時も運と流れに任せる。

自分でも悪い癖だなくと思うんだが、性格は簡単には矯正されない。

仕方ないと、この東方 project に関することを懸命に思い出そうとしていた。

「……. . . . . そうですね、この東方って主要キャラに何かしらの能力が付いてるんだよね？」

少し頭を使うとまずその事が思い浮かんだ。

俺にもそれがあるんじゃない!?

凄いワクワクしてきた。

なんだ？俺の能力はなんなんだ！？

そう思っただけを繰り返している、ある言葉が浮かんできた。

『拒絶する程度の能力』

……確かに俺はノーと言える日本人だけでも。

詐欺には絶対引つかからないとか言われたけども。

そんなふわつとした表現しなくても良くない！？

いや待て、ふわつとしてることは、つまり能力の使い方もふわつとしてるわけで、

応用が効くってことじゃない！？

……無いか。

「とりあえず拒絶できるならこの姿どうかできないかな。」

角が生えてるなんて絶対痛い奴だと思われよ……。

せめて生前(?)の姿にして欲しい。

「まあ、今度にするか。鏡とか無いしな。確認もできない。」

そんなことを喋っていると、足音が聞こえた。

「おいお前、もしかしてここに迷い込んだのか？」

長い白髪の少女が現れた。

俺はその少女に『ああはい、そうなんですよ』と言いたかったが……。

「…… その様だ。ここは見る度に景色が変わってしまつてな。どうも道がわからなくなる。」

「そういう風にできてるからな、この竹林は。」

また口調が痛い奴に……。

これも拒絶したいなあ。できたらただけどな!!

「なら付いて来な、出口まで案内してやるよ。」

そう言つて少女は俺の横をすり抜けて先に行く。

それに黙つて付いていく。

「…… あんた人間じゃ無いみたいだな。名前は？」

「天邪鬼の天鬼だ。」

俺は普通に自分の名前である『天木』と答えた。

「天邪鬼の天鬼……？」

アツハツハツハ!!! そりゃあのお伽噺の鬼の名前だろう? あんた面白いな。」

お伽噺と言われたのは癪だが、受けたようなので良いわ。

「本当なら何かしらしてみてくれよ。私を不死身から戻すとかさ。」  
笑いながらこちらに言ってきた。

「どうやら不死身の様だ。流石東方、人外が溢れかえっている。」

「ああ良いだろう。」

「お前は不死身ではない。お前は普通だ。」

また勝手に口が動く。

出来る筈も無いことをまあペラペラと。

「ハハハッ、何本気にしてん……………!?」

少女は驚いた様子で一瞬で俺から距離を取る。

「あ、あんた!!何をした!!!」

何を驚いて:… ああそうか、俺の冗談に乗ってくれたんだな。

全く、幻想郷にはユーモア溢れる人が一杯居るんだな。

それでは俺も盛大に乗ろうかな。

「やって見せろと言ったのはお前だろうか? 私はその言葉を再現したまでだ。」

少女は迫真の演技で体を悶えさせる。

「すげえな、演技だとわかってても不安になるくらい感情がこもっている。」

「があっあああああ!!!」

ハア、ハア…… も、戻った…… !?

あんたまさか本当に!？」

「なんならもう1度繰り返してやってもいい。私は天邪鬼の天鬼だ。」

「そ、そうかい……。」

本当に居たんだね。あんたは。」

物凄く動揺した演技。

主演アカデミー賞も狙えるレベルじゃないだろうか。凄まじいな。

その後少女は「竹林からは出してやる。だから、頼むから私達に危害を加えないでくれ。」と言われたのでノリでOKした。

無事竹林から出た俺は、家を探すことにした。

住所不定は流石にみつともないからな。

どこか静かな場所は無いかな……。

### 第3怪 犯人は現場に戻ってくる。

静かな場所、静かな場所は無いかとさまよっていると、結局最初の森が一番落ち着く事に気がついた。

そして、自分が最初に目を覚ました所に戻ってきた。

「…… やはり、ここが最も気が休まるな。」

…… 誰か近くに居るのか。

「そうなのかー。結局戻ってきたのかー?」

例のなのかー幼女が居たようだ。

「そうだな。どれ、その頭の札でも取ってやろうか。」「結構なのだー。」

あ、そのリボンお札だったんだ。

自分の口から出た言葉に驚くのは俺だけだと思ふな。

「いつから気付いてたのだー?」

「私にとって自分を偽り拒絶することは、むしろ本性を晒していることと同義と思え。」

拒絶は私にだけ許された特権なのだ。他人の拒絶なんぞ手に取るようにわかる。」

「そうなのかー。」「返事が一つ覚えの様になっているな。頭も緩くされているのか。」



つまりこの少女は封印されているのか。

もうね、自分の体じゃ無いみたいにならば喋り出す物だから、お陰で知らないことも知れる。

「……？よく分からないのだー。」

「まあ良いわ。いつの日かその札を剥がして、原初の妖怪を復活させるのも面白そうだ。今一度幻想郷をズタズタに壊すのもそれはそれで良い余興にはなりそうと思わないか？」

ウワー凄い物騒だ俺の口。

幻想郷を壊そうとして封印されたのか？この体は。

……忘れてたが家を探してるんだったな。

もういつそここに小さくても良いから建てよう。

「さて、私はここに屋敷を建てる。

どれ、お前も住んでみないか？」

勝手に誘っちゃったよ。

まあ、1人で暮らすのも心細いしな。

「良いのかー？」「屋敷には主人と従者が居るのは当然だろう？」「馬鹿にしてるのかー？」

いやそういう気で誘ったわけじゃない…… いや俺は誘ってない……  
ああもう!! ややこしい!!!

1回全部この口に任せるか。

「まあ、たまに休みに来るのさ。」

「好きにしな。我はなんびとたりとも拒む事はしない。」

「それよりどうやって屋敷なんか建てるのさ？」

「何を言っている？もう建っているではないか。」

…… は？何言ってるの？

見ると、俺の後ろには立派なお屋敷が……。

「おっきいのさ。いつの間に建てたのさ？」

「私が建てると言えば何でも建つ。それは自然の摂理だろう？」

「痛いヤツなのさ。」

この幼女!! 地味に刺さる事を言いおって!!!

痛いヤツなのは自覚している!!

だが面と向かって言わないで!!

「私は天鬼だ。お前は？」

「ルーミアなのさ。」

「そうか、よろしく頼もう。十字架に磔られた聖者よ。」

「痛いのだー。目にも心にも痛いヤツなのだー。」

痛い俺の口は置いておいて。

ルーミアと言うと、かなり前にプレイした東方紅魔郷の1面ボスカ。すっかり忘れてたわ。

屋敷の中はかなり豪華だった。

自室には鏡もあった。

なのですぐに試すことにしたよ。

「これは私ではない。私はもつと人間っぽいだろう。」

目を閉じて口に出した。

そのまま目を開けるだけで、鏡には生前の俺が映っていた。

やった!!実験は成功したんだ!!!

「よし、上手くいったな。」

結果に満足しながら自室を出た。

リビングでノンビリしながら自分と、自分の能力について纏めた。

まず、基本拒絶できるものは何でも拒絶出来るのだと思う。

限度がどこまであるのかわからん状況だが。

そう考えると恐ろしい能力だ。

屋敷を建てたのも『ここには屋敷があつた。それ以外は認めない』としたのだろう。

あと能力を自分に使う時は、『私は〜』とか付けなきやイケナイらしい。

相手や周りに使う時は基本命令形だったりする様だ。

次に俺のことだ。俺は幻想郷を壊そうとして封印されたらしい。

俺って侵略者だったのか。

封印したのも、恐らく手に負えないから蓋をしてしまえ的な感じだろう。

まあそれくらいしなきやイケない能力なのは確かだ。

今の情報量だとこれくらいが限界か。

次は情報収集だ。

## 第4怪 ⑨が⑨じゃ無くなった様です。

あれから1ヶ月。

情報収集の結果、この体の元持ち主は幻想郷をほとんど崩壊させた後、自ら封印されたらしい。

正しく意味の分からない奴だったらしい。

そしてこの1ヶ月で、屋敷に訪れる客が増えた。

「大ちゃん!!こつちこつち!!」

「チルノちゃん!!人の家で暴れたらダメだよ!!」

「ごめんなさい。チルノちゃん馬鹿だから……。」

「なに、見ていて飽きない。

それに気に病むことじゃない。妖精は妖精らしく、いつもはしゃいでいるのがお似合いだ。」

「すいません……。」

「ダイチャーン!!ホンダナガタオレター!!」

「チルノちゃん!?!何してるの!?!」

た。 どうやらここは湖が近かったらしく、そこにいつもいた妖精の2人が探検をしに来た。

そこを歓迎したら来るようになった。

いやあ…… やっぱ元気な女の子見ると微笑ましいね!!

意味深なことじゃなく!!

この2人の名前は、チルノと大妖精。

原作でも有名なコンビだ。

それだけに仲が非常に良い。

見ているほっこりする。

…… 屋敷に張ってあった補足用の結界に誰かが入り込んだ。

この結界、勝手に付いていた物だ。無論俺は作れない。

まず妖力弾から作れない。最近まで人間だったのに無茶を言うんじゃないよ全く。

さてまずはこの結界から相手の会話を聞いてみよう。

「全く、早苗の唐突な思いつきにはいつも振り回されて仕方ないぜ。」

「良いじゃないですか!!湖の近くにいきなり建った大きな屋敷!!」

くううう!!燃えますねえ!!そこに住んでいる奴が悪いやつなら倒して信仰もゲット  
できますし!!まさに一石二鳥です!!」

「はあ……。めんどくさい奴だぜ」

『YASIKI』

とのことらしい。

なんだかめんどくさい事が起きているらしい。

あの黒白魔法使い可愛そうだな。なんか、ごめん。

にしても、このまま上げて話も聞いてくれなさそうだしそのまま退治されそうだな。

「どうしたんですか？」

大ちゃんが話しかけてきた。

「ああ、どうやら何者かがこの屋敷に向かってきてきている様だな。

私を退治するのかなんとか……。」

「ええ!? たた、退治!? どうするんですか!？」

「いざとなれば私一人でも十分だが……。「何の話してるの!? アタイも混ぜて!!!」おおチルノか。

私を退治しに来ている者が居るようだな。どうするか迷っていたのだ。」

「なんだそんなことか!!」

大丈夫!! アタイが倒すよ!! アタイは最強だからね!!」

「ち、チルノちゃん!? 危ないからダメだ「それじゃ行つてくね!!」 あ!! ちょっと!!」

「まあ大丈夫だろう。馬鹿だと言っても、救いようの無いほど『馬鹿では無い』だろう。」  
ん? 今馬鹿ではないの所だけ妙に響いたな。

「だと良いんですけど……。」

とりあえず成り行きを見守ろう。

俺は外の映像を壁に映し出して、大妖精と一緒に見守ることにした。



『お外』

「やいやい!! その黒白魔法使い!!」

早速チルノか。

「ん? チルノじゃないか。どうしたんだぜ?」

「あんた達あそこの屋敷に攻め込もうとしてるんだって?」

あそこは私と大ちゃんとルーミアの秘密の休憩所なの!! 勝手は許さないんだから!!」

「ダメですよチルノさん!! あそこには悪い妖怪が居て、お宝を守ってる設定なんですから!!」

設定って言っちゃったよあの子。

「……誰?」

「そ、そんな!? 忘れられていた…… だど!? 準主人公なのに!?」

哀れ緑の巫女。

項垂れるのも理解できる。

「でもまあ、チルノが大丈夫って言うんだから大丈夫だろ。」

黒白魔法使いが帰ろうとするとチルノが止めた。

「ちよつと魔法使い!!まさか逃げるの!？」

「そうだけ?行く意味もないのに行くのは労力の無駄だぜ。」

「それならアタイと弾幕で勝負してから帰るんだね!!」

前の勝負じゃ負けちゃったから次は勝つよ!!」

ん?口調が変わった?

なんだか姉御口調になった気が……。

「そういうことなら良いぜ!!」

あ、良いんだ。

「じゃあ私は隅で観戦してますよ……。」

未だシヨックから抜け出せない緑巫女。

ドンマイ。

「何枚だ?」「2枚でいいでしょ。」「わかったぜ!!」

少女達は互いに距離をとってスタンバる。

「準備は良いか!!」「いつでも行けるわよ!!」

「それじゃ、始め!!」

それを口火に綺麗な色の妖力弾が飛び交う。

右へ左へ前へ後ろへ上へ下へと華麗に避けては弾幕を張る。

そんな中魔理沙が早速仕掛けた。

「悪いけど早速攻めさせてもらうぜ!!」

魔符『スターダストレヴアリエ』!!」

宣言と共に小さな星屑の様な弾幕が降り注ぐ。

チルノはと言うと……。

「そんな適当にばら蒔いて、隙だらけよ!!」

なんと颯爽と避けていた。

華麗に星屑を一個一個判別して隙間を縫うように。スルスルスリと避けていた。

「なっ!!?お前本当にチルノか!」

「失礼よ!!これくらい避けられるわ!!」

なんてたつて……『アタイはアタイ』なんだもん!!」

「は!?どういうことだぜ!」

そうこうしてる間に魔理沙のスペルカードは終了した。

「次はアタイね!!」

氷符『アイシクルフォール』!!」

「その対処法はわかってるぜ!!」

チルノが宣言したと同時に魔理沙はチルノの前に移動する。だが。

「このアタイが弱点をそのままにすると思う?」「!?」

チルノの前に立っていた魔理沙は背後からのつららでピチューンとなった。

「チルノ、お前本当に何があつたんだぜ!」

「だから失礼よ!!白黒魔法使い!!」

そう言いチルノはまたすぐに宣言をした。

「次で決めるよ!!」

凍符『マイナスK』!!」

すると、周りの空気が一瞬で凍りつき、空気中の水分が凍った氷達が魔理沙を襲う。

それをヒラリヒラリと避ける魔理沙。

「さ、寒いぜ!!風邪ひかなきゃ良いんだけどな!!」

メチャクチャデカイ氷塊が魔理沙に迫る。

「これは流石に危ない!!」

恋符『マスタースパーク』!!!」

八極炉を出し、そこから極太のレーザーを出して氷塊を防ぐ。

「危なかったぜ……。この勝負いつ終わるかわからないぜ。」

「大丈夫だよ、もうアタイの勝ちさね。」

「え?」

チルノは氷塊の影に隠れて魔理沙に接近していた。

魔理沙の横に立ち後ろから氷塊を発生させ、魔理沙にぶつけて撃破する。

「言ったでしょ? 白黒魔法使い。」

アタイは最強だよ。」

結果、チルノの勝利で幕を閉じた……。

『Y A S I K I』

その様子を見ていた俺と大妖精。

「……なあ大妖精よ。」「なんですか?」

声を掛けると笑顔で答えた大妖精。だが笑顔が怖い。

「あれはどうすれば」「バカワイイチルノちゃんに戻してください。」。…。わかった。」

『チルノは馬鹿だ』

半ば願うように現実を拒絶した。

戻ってきたチルノはいつも通り馬鹿だった。

良かった。本当に。

## 第5怪 赤い屋敷と天邪鬼：前編

チルノの話だと、この近くに吸血鬼が住む屋敷があるらしい。

興味が湧いたので早速行くことにした。

「手土産に俺の血でも上げればいいのかな？」

「…………… マズそうだけどなんとかなるか。」

敬意だけは伝わってくれることを祈る。

まだ死にたくないしな。

「近所付き合いは大切だもんな。」

顔だけでも出しに行こう。」

「☆♪□□◆?」

「ああそうだ。少し散歩に行くことにする。」

「????? ● ▲ ▼?」

「なあに、少ししたら戻るさ。」

「…………… 何言ってるのかわかるのかー?」

「当然だろう。」

わからないに決まってる。口が勝手に動くのだ。

現在俺の家にはルーミアと近所の妖精が遊びに来ていた。

その2人(?)に留守を頼んで、俺は紅魔館と呼ばれる屋敷に向かった。

### 《紅魔館》

……まあ向かったって言っても10秒そこらなんだが。

距離的には決して遠くはないが、飛べばすぐの距離だ。

挑発しているとも取れる距離だ。

「……。」

門番らしき女性が居る。

声を掛けようとしたが。

「…… z z z z z z。」

どうやら熟睡中の様だ。

心苦しいが、起こさせてもらおう。

「それ！」



デコピンをしてやった。

「ひびくぶ!!」

頭を大きく仰け反らせるも、なんとか体勢を戻した。

書齋で暴れ回ったチルノにこれを食らわせた時は、二回転しながら顔から着地したんだが……。

他の客人も怯えていたな……。

あれは申し訳なかった。

「あれれ?お客さんですか?」

お客さんが来るなんて話、咲夜さんから聞いてないですね。」

鈴の様な綺麗な声を出した門番さん。

見た目も凄く綺麗だ。

「お騒がせしてしまい申し訳ない。」

最近ここに居を構える事になった者だ。一応、挨拶をと思つて来た次第だ。」

手土産の自分の血が入った水筒の様な物を見せる。

「それは?」

「手土産だ。」

「中身は?」

「吸血鬼が居ると聞いてな。それなら、我が血をと思った訳だ。」

「あなたのお名前は？」

「天鬼と言う者だ。」

色々と質問される。

それも当然だな。いきなり押しかけたのはこっちだ。ここは素直に従う。

「わかりました。その手土産は私が届けておきましょう。」

「私が自ら会いたいのだが……？」

「ダメですよ。」

「………ほう？」

門番さんの言葉を口火に、自分の（制御が利かないが）体から殺気が溢れるのがわかる。

俺自身は別にいいしむしろお願いしたいくらいなのだが、体が拒否した様だ。

「私が自ら会いたいと言っているのにそれを無視すると……？」

命知らずにも程がある。」

「こ、この潰される様な殺気………!!」

「不敬である。」

『お前は、この門を快く開け、私を迎え入れなければならない。』

「!？」

その言葉が出た瞬間、門番さんの体がまるで意思を無視している様な動きをし、門を開いた。

「よ、ようこ、そ、こうま、か、んへ……。」

必死に抗おうとしているがこの能力の前にその抵抗は無意味な様だ。

……強引すぎじゃない!? なにしてんの!? 俺は!!

「わかれば良いのだ。わかれば。」

いやそうじゃなくて!!

これじゃ死に行くようなもんじゃん!!

「あら、お客様の予定は無いんだけど。何者かしら?」

屋敷に入ろうとするとすぐにメイド姿の銀髪の少女に会った。

東方の知識が0に近い俺でも知っている。

十六夜咲夜。

別名、鼻から忠誠心。

生粋のロリコン。

能力は『デイ〇様程度の能力』みたいな感じ筈だ。

「全く、美鈴は何してるのよ。また寝ていたのかしら。」

「『快く』門を開けてくれたぞ?」

「……彼女に、何をしたの。」

刺すような殺気が痛い。精神的に。

もはや暴走状態の俺の体。

まるで俺以外の人物に奪われたかの様に

「何、少し命令しただけだ。」

次の瞬間、周りに大量のナイフが現れた。

「邪魔だ、『帰れ』。」

啞然とする内心とは別に、ナイフが方向を変えて咲夜さんの方に向かう。

「なっ!?!」

時を止めたのか、一瞬でその場から姿を消す。

しかし、この体はそれを良しとはしなかった。

「お前の能力は少々厄介だな。眠ってもらおう。」

「何!?!」

咲夜さんの腕を掴み、再びナイフの嵐の中心へ放り込む。

時を止めた咲夜さん……。だが、それは一言拒絶するだけで攻略されてしまう。

「私の時が止まる……。いや、そんな事が許される訳がないだろう。」

暗示が発動し、俺には止まった時の中を舞う咲夜さんの姿がはつきりと映っていた。

「飛べ、壁にめり込んで次の日に目覚めるがいい。」

「そんな……!? 止まった時の中を!?!」

俺は咲夜さんの顎に綺麗なアツパーを食らわせ、天井にめり込ませた。

よくあるギャグ漫画の様に首だけ埋まってぶら下がる咲夜さん。

…… 少し笑ってしまった。

「フツ、滑稽だな。」

もう行くな!!これ以上迷惑を掛けるなあああ!!!

そんな内心の叫びも虚しく、俺の足は前へ前へと進んでいった。

## 第6怪 赤い屋敷と天邪鬼：後編

「ふむ、壁の色の趣味以外は良い屋敷だな。」

ゆったりのんびりと人様の屋敷を歩いている不審者が1人。

っていうか俺だ。俺。

もう諦めて屋敷の主人に挨拶してバレる前に逃げてやろうってことにした。

「はて？ここか？」

なんだか不思議な雰囲気か漏れている鉄製の扉の前に来た。

ドアノブに触れるとバチツ!!とした痛みが走る。

この季節に静電気って……。

ドアを開くと地下へと続く階段があった。

「なるほど。地下か。敵から隠れるには良い判断だな。」

誰も主人が地下にいるとは思わないだろうし、結構頭が回るみたいだな。

……俺自身なんでここに主人が居ると確信してるのかわからないがな。

「……。」コツコツコツ……

階段を下る音だけが木霊する。

下れば下る程に雰囲気が濃くなって行く。

「む、ここで階段は終わりか。」

ようやく階段は途切れ、目の前に大きな牢屋が目に入る。

…… あつれー？ここじゃないのか。

なんだ？懲罰房か何かか？

「…… むう、だれえ？」

気の抜けた声が檻の中から聞こえる。

幼い少女の声だ。

「この屋敷の主人が何処にいるか知っているか？」

「お姉様……？知らない。いつもドアの前で喋るだけだから。」

「…… どうれくらいここに居るんだ？」

「んー…… 多分、490年くらい閉じ込められてたけど、最近の外に出させて貰えることも多くなつたよ。」

出させて貰える様になつたとはいえそんなに！？

俺なら頭おかしくなる。

「フツ、話し相手がいるだけ良いじゃないか。私は誰もいない場所に600年封印されていたぞ。」

尚、俺の方が長いようである。

え？そんなに長く封印されてたの？

マジで？

「ふーん……どうでもいいや。」

その瞬間、体の中で爆発が起きた。

「グフツ!」「あ、またやつちやつた……。」

体が燃えるように熱くなる。

この衝撃で思い出した。

この紅魔館には2人の吸血鬼が居ることを。

そして理解した。この少女がどんな存在なのか。

東方紅魔郷のEXボス、フラン・スカレット。

能力は『なんでも破壊する程度の能力』

だが、能力の暴発が原因で周りから恐れられ、長い間この地下に閉じ込められていた。

「あーあー……面白い玩具だと思ったのにな。」

「私が……死ぬ、だと……?」



俺は死を悟った。

恐らく心臓でも破壊されたのだろう。

俺は、静かに目を閉じた。

そして……。

「いや、そんな物が認められる訳がないだろう。」

俺は普通に復活した。

同時にとても呆気なく立ち上がった。

いやー、自分の能力を忘れてたわ。

「……え？」

「更によえばお前の能力なんぞ私にはもう通用しない。」

「うそ、なんで壊れてないの？」

「私を殺せるのは私だけだ。」

「……。」

俺が服の埃を払っていると、少女はポカーンとした顔になった。

その後。

「………… アハツ♪あつはハハハハハハはは♪」

狂ったように笑いだした。

「ほんとだー♪すつごーい♪」

何回壊そうとしても効かないや♪」

そう言つて何度も何度も俺の体を破壊しようとする。

だが一向に効かない。

「ねえねえ、あなた名前は？」

「天鬼と言うものだ。ここには挨拶をしに来た。」

「そうなんだ♪あたしはフラン。フランドルスカーレット♪」

あまき凄いな!!なんで壊れないの?」

「それが私だからだ。」

「ふふ♪なんでも良いけど、壊れない物に会うのは初めてだよ!!」

ペタペタと歩いてくる音がする。

ガシャン!!と牢屋が壊れた。

「ねえねえ!!もつとあなたの話を聞かせて!!」

牢屋を壊して出てきたフランと名乗った吸血鬼は、少女らしいキラキラした笑顔で俺

に話を催促した。

そこで、後ろから足音と声がした。

「パチエ、フランの部屋の結界が壊されたって本当!？」

「ええ。いとも簡単に壊されてしまったわ。」

「それこそ、指で触っただけで壊されたくらいに。」

「恐らく例の侵入者よね。」

「咲夜を吊るした奴と一緒にのかしら?」

「そうでしょうね……ほら、あれみたいよ。」

足音が俺の後ろで止まる。

振り返ると、そこには紫色の体調の悪そうな魔法使いとこれまた可愛い少女が立っていた。

「ようこそ、紅魔館へ。」

遅れてしまつてごめんなさいね。この館の主人の、レミア・スカーレットよ。」

「お初にお目にかかる。私は天鬼と言う者だ。」

ふう……。これで当初の目的は達せそうだ。

「それで、何の用かしら?」

「最近この近くに居を構えることになった。その報告と挨拶だ。」

「ああ、最近近くに建つたつていうあの屋敷の主人ね。」

でも、挨拶にして少し……いえ、かなり乱暴ね。」  
それは弁明できない。

俺もやりたくてやった訳じゃないのだ。

「ああ。直接会いたいと言ったのだが門番が入れてくれなくてな。

少し乱暴な手を使わせてもらった。」

「そう、まああれくらいで死ぬ訳ないから良いのだけれど。

……それで、私の妹になんの用が「ねえねえお姉様!!あまきって凄いなだよ!!」……え?」

レミリアと話していると、フランがレミリアに駆け寄って行った。

「アマキって、こいつのこと?」

「うん!!あまきってね?フランが壊しても壊れなかったんだよ!!」

「本当に!?あ、それよりフラン!!何かされなかった!?!」

「うん!!」「それなら良いわ。」

……仲が良さそうで何よりだ。

「さて、それでは私は帰らせてもらおう。

これはお土産だ。では、ささらばだ。」

俺は普通にドアから出て行った……ら良かったのになー。

俺はあろうことか飛び上がって、天井を突き破って屋敷から出ていき、飛んで帰って行った。

「ちよつと!!!何してるのよ!!!」

ごご、ごめんなさい!!

内心で土下座しながら俺は帰った。

《一方レミア達》

「結局あいつはなんだったの!？」

プリプリと怒るレミイ。

まあ別に怖くないのだけれど。

「落ち着きなさいレミイ。」

ほら、あの男が持ってきたお土産でも見てみたら？」

「……そうね!!修理は咲夜に任せましょう!!」

内心咲夜に手を合わせながら、嵐のように去って行った男が置いて行った手土産を見てみた。

「これは……血?」

「吸血鬼だっことを知っていた様ね。」

味見をしてみましよう。」

「あ、お姉様!!わたしにも頂戴!!」

「ダメよ!!毒でも入ってたらどうするの!」「吸血鬼に毒は効かないって前にお姉様が言っただじやない!!」

痛い所を突かれたレミイ。

お土産を独り占めしようだなんて、大人気ないわ。

「……わかったわよ。」「わーい♪」「フフツ……本当に単純ね。」

レミイの言う通りだ。

つい最近まで狂気に支配されていたとは思えない姿を見せるフラン。

その微笑ましい姿に笑い込みが漏れてしまう。

「パチエ!!何笑ってるのよ!!」

「あら、お土産はもういいのかし」「さあ!!味見してみましよう!!」

あなたも充分単純よ。レミイ。

二人とも血を指で掬い、口に入れる。

直後、2人の肩がビクツツと震える。

何事かと思っていると、レミイが咳き込みながらこちらを振り向く。

「げっほげっほ!!ちよっと!!何よこれ!!」

「あら?どうかしたの?」

「濃すぎるわよ!!どれだけ薄めれば飲めるようになるかわからないくらいに濃いわ!!」

「そー?フランは丁度いいけどなあ♪」

凄く美味しいよ。癖になっちゃうくらいに。

……でも確かに一気に飲めないかなあ。」

妖怪の血は、その血の提供者が強ければ強い程に濃くなる。

つまり、それ程さっきの男は強いという証明にもなる訳だ。

「……………末恐ろしいわね。本当に。」

尋常じゃない強さを持つ可能性がある未知の訪問者に対して、また警戒度が上がってしまっただ。



## 番外編：か得天邪鬼の被害者達

side：霊夢

例的天邪鬼が来てから、はや一ヶ月。別にこれといった異変や異常は見当たらなかった。

と言うのも、紫の話だとどういいう訳かその天邪鬼は男にしか変化しないそうだから。実際はできないのか、しないのか、分からないと言う話なのだが。

この一ヶ月で博麗神社にやって来たのは片手で足りるくらい。

それも全て女性。

紫の話が本当だとすると、その天邪鬼は来ていないことになる。

「……本当にそんなに警戒する様な相手なのかしら。ちよつと厄介な能力を持つてるだけなんじゃないの？」

そんな独り言を漏らしながらお茶を啜る。

紫曰く、『引き分けることはあっても、負けることは無い』能力なのだそう。

実際に見たと言ってもほとんど一瞬だったし、話に聞くだけじゃその怖さもわからない。

「まあ、何もしないのなら良いわよねー。」  
呑気なことである。

side：妹紅

有名なお伽話に出てくる奇妙な鬼、『天邪鬼』 天鬼』

京の都では子供でも知っている鬼の名だった。

『いい子にしていないと、天邪鬼が来て誰もいない所に閉じ込められるぞ』なんて躰の文句になっていたりする。

私は一ヶ月前、そのお伽話の鬼に出会った。

いや、『出会ってしまった』

竹林で迷っている角を生やした妖怪の男を見つけて出口に案内している時のことだ。

『私は天邪鬼の天鬼だ。』

そう名乗った。

面白い冗談だと思って笑った。

そして、次の一言を放った時のことを、今でも後悔している。

『本当なら何かしらしてみてくれよ。私を不死身から戻すとかさ。』

そう言うと、男は『ああ、良いだろう。』と言って何か呟いていた。

冗談だと言おうとした時だった。

ドクンツ!!

心臓が跳ねた。嫌な汗が、吹き出した。

体を蝕む様な嫌な感触。

最初は何かわからなかった。

だが、久しく思い出した。

蓬莱の薬で不死になった者はまず、死なないようになることで恐怖を失う。

ここまで言えばわかるだろう。

それは何百年、はたまた何千年ぶりに感じる、『恐怖』だった。

その恐怖から少しでも逃げようと、体が反応して男から離れた。

何をしたのか問おうとした瞬間。

体を激痛が走った。

蓬萊の薬を飲んだ時の様な、体を搔き回される様な痛み。

その痛みが引くと、思考もクリアになる。

そして、感覚的に感じた。

戻った。

普通の体に、戻った。

男に本当に、あのお伽話に出てくる鬼なのかと聞く。

男は……いや、その天邪鬼は自分のことを、改めて『天鬼』と名乗った。

驚きと動揺で、たじろいでしまった。

次に、慧音や寺子屋のことが頭をよぎった。

天邪鬼に『あいつらには手を出さないでくれ』と願うと、『良いだろう。』と答えた。

どこまで信じて良いのか分からなかったが、今は信じる他無い。

それしか方法は無いのだから。

私は今、不死身から戻った身で穴蔵に閉じこもっている。

怖いのだ。何もかもが。

風のさざめきが、竹の揺れる音が、歩く自らの足音までもが。

今までの恐怖のぶり返しなのか、全てが怖く感じてしまう。

どこからか妖怪が狙っているのではないか？

妖怪じゃなくても、何者かが私を狙ってるんじゃないのか？

そんな考えがずっと頭にこびり付いている。

コツ、コツ、コツと歩く音が聞こえる。

その音だけで、体がビクつく。

「……妹紅、今日も来たぞ。」

今までの私なら、この声を聞けば嬉しくなっただろう。

親しげに、会話を交わして居ただろう。

だが今の私にはそんな慣れ親しんだ声すらも、恐怖の対象となっている。

「……慧音？」

「そうだ。私だ。」

竹林で寺子屋を建てて子供達に読み書きを教えている半妖の教師。『上白沢慧音』

全てが怖くなってしまった私の為に、食べ物等を毎日持って来てくれている。

慧音が止めていた足を、再び動かそうとする。

その一挙一動に恐怖した。

「慧音……ごめん。」

私は、自らの能力である炎で線を引いた。

「これ以上、近寄らないでくれ。」

「妹紅……………」

「……………ゴメン。」

「……………」

私は、念願だった不死身からの脱却をなし得た。

その代償に、もはやまともに誰かと会話するという事が、不可能になっていた。

## 第7怪 子孫

突然だが俺の能力に誤解があつたらしい。

俺の能力は『拒絶する程度の能力』で、発現の仕方にパターンがある。

『私が〜』と付けるのは自分への暗示。例えば。

『私が弱い……？いや強い』

といった感じで、自分に関する事実を拒絶して否定させることができる。

一方で、普通に命令口調で物事を否定すれば暗示以外なら能力が発動すると思つていたのだが……。

この命令口調での能力行使、実は圧倒的な能力の差が無いと使えないことが判明した。

それだけでなく、命や生命の組み換え、書き換え等も命令口調では発動しないらしい。これが判明したのはつい昨日。

黒犬が居たので、悪戯で白犬にしてやろうとしたのだが、命令口調だったせいか失敗したのだ。

それからヒントを得て、数々の実験をチルノ相手に菓子で釣って付き合ってもらつて

いた。

結果、以上のことが判明したのである。

「うーん……難しいな……。そしてややこしい。」

現在俺しか居ない館の自室で、自分の能力に関することを書くようにしている資料に書き換えを行っていた。

…… 久々のこの体に関することの進歩である。

「んー……。疲れたああ……。」

書き換え作業のせいで少し目と腰が痛い。

少し散歩でもしよう。

そう思つて玄関を開けてみると……。

「うう……。み、水をおお……。」

少女がぶつ倒れていた。

え？なんで？

とりあえず、少女を自室にしかないベッドに寝かせ、様子を見ていた。



目に見えてわかる程疲弊しており、心身ともに疲れきった様な顔だ。

だって、久しぶりにゆっくり寝れるとも思っている様に安心した顔してるもの。

「そうだ、冷えピタ…… は無いから、濡らしたタオルでもおでこに乗せてあげよう。」

そう思いついて水桶に水を入れ、タオルを濡らして絞っておでこに乗せようとした。

前髪が邪魔だったのでかきあげると、2本の角が生えていた。

あれ、この子人間じゃないんだ。

まあいいや。とにかく看病しよう。

それから、何度かタオルを替えたくらい…… 4時間くらいか？

それくらいして少女が目を覚ました。

「んん……？こは……どこだ？」

「目が覚めたか。館の玄関前で倒れていたのな。保護させてもらった。」

「そうか……。」

喋れるくらいには復活したらしい。良かった良かった。

「あんた、名前は？」

「私の名は天木。天邪鬼だ。」

「あんた天邪鬼なのか!？」

「私はせい……ゴホン。わ、私は……ワタシハ……。」

どんだん声が小さくなっていくな。

もしや訳ありか？

「言いにくいなら言わなくて良い。」

こういう時は無理に言わせない方が後々めんどくさいことに巻き込まれないで済む。

「そうかい…… すまないね。」

謝られたが、別にいいと首を横に降しておく。

とりあえず、玄関前で言つてた様に水をあげた。

がぶ飲みしでした。よっぽど喉乾いてたんだな。

side : 鬼人正邪

私は、追つてから逃げる為に全力で走っていた。

くそ!! 幻想郷の奴らめ!! 幻想郷が転覆しかけただけであんなにかつかするか普通!!

1回、私从天邪鬼の御先祖様がやらかしたんだろ!?

対策くらいしとけてんだ!!

気力の続く限り走ってようやく巻くことができた。

もう、フラフラもい所と言った感じだった。

両膝を付いて、息を整える。

整える度に喉が乾いていく。

水筒を開けてみると、空っぽだった。

ピンチだ。もはや立つことも出来ないくらい疲れている。

そのまま倒れ込んだ。

「うう……。水をおお……。」

そしてついに、意識がぶっ飛んだ。

目が覚めると、知らない天井が広がっていた。

「目が覚めたか。館の玄関前で倒れていたのな。保護させてもらった。」

知らない男が隣でそう言ってきた。

凄く驚いたが顔には出さなかった。偉いぞ私。

その男は、なんと天邪鬼らしい。

まさかこんな所に同族がいるとは思わなかった。

そのせいで本名を言いかけたが、既で思い留まった。

私の名前は幻想郷中に広まっている。

言うのは間違いない悪手だ。

なんと名乗ろうか迷っていると、言いにくいなら言うなと言ってきた。

これは……優しいな……。

…… こういう奴は、騙しやすいこと極まりないんだよなあ。

思わぬ幸運だ。

このまま騙して、搾り取れるだけ搾り取って逃げてやろう。

それまでは、ここで少しお世話になることにする。

と、水をがぶ飲みしながら考えていた。

## 第8怪 子孫②

今あたしは、あたしを保護して介抱してくれた天邪鬼の屋敷を見て回っている。

逃走経路の確認だったり、金目の物の物色だったり、ただ部屋を覚える為だったり。

色々あるがそんな所だ。

「クツクツクツ…… 優しさってのは、身を滅ぼすことも多いんだよな。」

そう独り言を言っていると。

「何を一人で笑っているのだ。」「わひゃあ!!」

後ろから天邪鬼…… 天鬼とか言ったか？

そいつが急に喋りかけてきた。

「変な奴だ。ほら、髪にホコリが付いているぞ。」

「本当かい？取ってくれよ。」

……ん？天鬼って名前に驚かないのかって？

確かにあたし達天邪鬼の祖先だが、実はそう珍しくないのだ。

縁起が良いみたいになされていて、結構居る名前なのだ。

大体その本物の天邪鬼の祖先がこんな場所に居るわけが無い。

考えなくても分かる。

「迷子になるんじゃないぞ。」

「あたしの事がキ見たく思っていないかい？」

「実際子供だろう。」

ケツ!!うるせえやい!!

余計な御世話だつてんだ!!

……さて、いつここから逃げ出すか。

あと2日くらい……いや、今夜にでも抜け出すか。

世話になった礼がわりに盗るのは少しだけにしといてやるよ。

ありがたく思え。

「夕食が出来たぞ。」

「おお、美味しそう!!」

「あたいが食べるんだからこれくらいしてもらわなきゃね!!……ジュル。」

「美味しそうなのだー。」

「……………」

「ん？どうした？」

な、なんでここにこいつらが居るんだ!?

まさか面識があつたとは思わなかつた……………」

「い、いやあ…………… ちよつと食欲が無くてね。」

「ふむ…………… それもそうか。病み上がりだからな。」

「だったらあたいが食べてあげる!!」

「ダメだぞチルノ。食べるだけ食べ。残しても良いからな。」

「あ、ああ。」

さつさとある程度食つて、こいつらがあたしのことを思い出す前にここを離れないと……………」

すると、あの金髪のがキがこつちに近づいてきて。

『変な事はしない方がいいのだー。』

間抜けな声なのに、なにやら底冷えするような声で耳打ちしてきた。

あたしはと言うと……………」

「あ、あははは……………」

笑うしか無かった。

天鬼 side

あの少女、どうしたのだろうか。

やけに顔色が悪いが。

今俺達は夕食を食べていた。

食欲が無いと言ったのは本当らしく、あまり箸が進んでいない。

ちなみに今日の献立は、魚の煮付けと、冷奴と、味噌汁。それに茶碗蒸しと白米だ。簡単なものしか無いが、急にチルノ達が来たのが悪いと思う。

まあ、美味しそうに食べてくれるから良いんだが。

「本当に美味しいのだー!!」

「隙あり!!」「あー!!チルノちゃん!!私の煮付け取らないでよー!!」

「タメだぞチルノ。濟まないな、大妖精。お詫びに私の茶碗蒸しを贈呈しよう。」

「え!?ホントですか!?やったー!!」「あー大ちゃんだけズルイ!!」「狡くないもくん♪」

賑やかな食卓と言うのは本当に良いものだ。



今日も飯が美味しい。

「ごちそうさまでした……。」

「おお、よく食べたな。部屋でゆっくりしておくといい。」

女の子は頷くと、ゆっくりとした足取りで部屋を出た。

その後も、チルノ達も食べ終えてそれぞれ帰って行った。

部屋に行つてみると、少女がうなされていた。

近づいて撫でてやると、少し安心した様な顔になった。

「ん、あんた……?」

「おっと。起こしてしまったようだな。」

「……いや、いいよ。代わりに、もう少し撫でちゃくれないかい?」

「お安い御用だ。我が子孫の頼みだ。」

ん……? 子孫……? ?

部屋に帰ると、布団に入った。

寝苦しかったが、少ししたら、何か頭に暖かいものが頭に乗ってきた。

なんだかとても安心できた。

なんとなくだが、自分はこの暖かさに、ちよつとした懐かしさを覚えた。

目を開けてみると、あの天邪鬼があたしを撫でていた。

「おっと。起こしてしまつたようだな。」

そう言つたヤツに、いやいと首を降つておいた。

代わりに、もう少し撫でてくれと、らしくないことを言つていた。

なんだか、もうこの時点で謀つてやろうとか、逃げようとか、そんな考えなんて頭か

ら消えていた。

ただただ、この男……いや、この人の手の暖かさと、安心感に包まれていたかつた。

そして、そんなあたしにこの人は語りかけてきた。

『お安い御用だ。我が子孫の頼みだ。』

その時、とても納得した様感じた。

そうか、この人があたしの……『あたし達』の……!!!

## 第9怪 腹黒

少女は落ち着いた後に、自分の名前を明かしてきた。

『鬼人正邪』

なんと種族は天邪鬼らしい。

正邪ちゃんと呼ぶことにした。

自分の口から子孫という言葉が出た意味がやっと分かった。

そのせいか、正邪ちゃんは俺のことを『ご先祖』と呼んで、心做しか甘えてくるようになった。

まあ、ご先祖だから親みたいな物だもんね。

それはそうとして、俺には少しやりたいことがあるのだ。

『幻想郷』

まず普通の人間が来るような、来れるような場所じゃないのは明らかだ。

だが、何の因果か俺はこうして体を借りることで幻想郷に入り込むことができた。やることとなったら一つしかない。

「ルーミア、チルノ、大妖精、正邪、あと妖精諸君、少し良いか？」

「なんなのだー?」

「アタイ呼んだ?」

「どうしたんですか?」

「なんだ?ご先祖」

「「☆△←○□□→???」」

まず館に居る子達を招集した。

妖精は、いつの間にかここに居着いていた。

日に日に数が増えてきている気がする。

そして何故か館を掃除してくれたりしているのだが、理由は分からない。

「やりたいことがあつてな、少しここを離れることが多くなるかもしれん。」

「「「えー!?!」」」

「「ピロピロ☆△←!?!?!?」」

まあ驚くよな。

立場が逆だったら俺も驚いてる。

「ご先祖、あたしはもうここしか安心できる場所が無いんだけど!?!ご先祖はあたしを見

捨てるのか!?!」

「「もうご飯食べれないの!?!(のかー!?!)」」

「チルノちゃんそこじゃないよ!!ルーミアちゃんも!!」

「ああ心配しなくてもいい。離れると言ってもそんなに頻繁じゃない。普段はここに居るさ。」

そう言うのと、みんな安心した様だった。

慕われているようで嬉しい。

ここで、正邪ちゃんが疑問を浮かべた。

「そういやご先祖、やりたいことってなんなんだい?」

聞いてくるのはわかっていた。

ふっふっふ……。聞いて驚け!!

「フツ…… 観光だ」

「『観光?』」

「ああ。封印を破ったのは良いが、600年も封印されていたとなると色々変わっているだろうと思っただけ。」

「ああそういうことですか」「納得だな」

幻想郷のことなんか知らないし?

唯一知っている紅魔館を含めて有名な場所を回りたいたいと思っていたのだ。

「だから、月に何度かここを離れるかもしれん。その時は自由にしてくれ」

「あたしも付いていっちゃだめかい？」

正邪ちゃんが子犬みたいな目で見てる。やめて!!心が痛い!!

「それは……考えてみる」

そういうと正邪ちゃんは喜んでいた。

断わり辛い……。

「私は少し用があるので出てくる。準備もあるしな」

「「はーい!!」」

「ピロピロ〜!!」

妖精含む子達にそう告げて外に出た。

「……………」(ボソツ)

ん?俺今何か言った?

本当に自分の体を上手く扱えない。

少し離れた場所で足を止めた俺。

実は自分でも何が何だかわかっていない。

「居るのなら出てこい。覗きは感心せんぞ?」

誰もいない場所にそう言う俺。

え?どしたの?

「あら……。わかっていたの。悪い人ね」

そうすると、空間が裂けて女性が出てきた。

え？何事!?

「こうして面と向かうのは久しぶりだな。『八雲紫』」

「できれば、もうこんなことは無い方が良かったのだけれど」

「そう邪険にするな。今回は少し取引をしようと思ったのだ」

八雲紫と言えば、妖怪の賢者とか言われている幻想郷の管理人みたいな人か。

気苦労も多いんだろうなあ。お疲れ様です。

「あら？随分と強気ね。こちらはもう封印の準備はできてるのよ？」

「……。はあ。年月が過ぎて少しは利口になったかと思えば、あまり変わりはない様だな」

「……。どういう意味かしら？」

それは俺が聞きたい。

「あの時俺は、封印されたんじゃない。」

……。封印『されてやった』だけだ」

「……。」

八雲紫さんの眼力が強い。怖い。

殺気みたいのも出てるし。

「なんの、意味があつてかしら？」

「あの時の幻想郷はまだできて間もない頃だったな。そのせいか、あまり面白くなかった」

「……………」

「そして私は思ったのだ。なら、時が経てばどうなるのだ？とね。

幸い私には時間があつた。それも、馬鹿みたいな量のな。」

「……………それが？」

「まだ説明が足りないか？お前はあの頃から私を警戒していたなあ。

私はそれを利用して、お前が幻想郷の管理人が務まるのか確かめた後に、封印を受け入れた」

「……………それで？封印を受け入れた訳は？」

「お前が私を気にせずにのびのびと幻想郷を管理できるようにと言つた、私なりの配慮だよ？」

「……………っ!!」

八雲紫が顔をしかめる。色々伏線的なのが回収されてる所悪いが俺はなにがなんなのか理解出来ない。



「さて、ここからが本題だ。

……八雲紫、お前はあと何年持つ？」

「え？」

八雲さんが驚いた顔をする。

「話を聞く限り、幻想郷の管理はとても上手く出来ている様子じゃないか。

人間と妖怪のバランスを上手く保ち、たまに異変を起こして薄れかけていた妖怪への畏れを保ち、妖怪達への抑止力にもなった。

素晴らしいことじゃないか。私は感心したよ。」

確かに、俺にはそのどれも出来そうにないな。

「だからこそ、私は心配なのだ。

幻想郷の平和を保ち、博麗の巫女を育てて博麗結界を絶たない様になっている。

妖怪の賢者、八雲紫。

その名はもう人妖関係なく公の物だ。」

「……………」

八雲さんが少し切羽詰まった顔をしている。

「皮肉な物だよ。本当に。」

幻想郷が平和になるごとに、人妖のバランスが上手く行く程に、この問題は浮き彫り

になるよなあ。」

俺の声が少しゲスい感じになる。俺ってこんな声出せたのか。

「八雲紫、お前への畏れは…… 足りているかア？」

「ツ!？」

…… ああ、そうか。そういうことやつと理解できた。

「妖怪には欠かせない人間からの畏れ。それが無いと、妖怪は姿を保てはしない。

幻想郷を幾度も救ってきた博麗の巫女の育て親。人間達を妖怪の暴走から守り、上手くセーブしている。

それだけで、お前への人間からの畏れは薄くなる。

ところで、幻想郷の管理の後釜は居るのか？」

そう、八雲さんは幻想郷の管理を上手く行っていた。

それも、『上手く行き過ぎている』と言えるほどに。

「そ、それがどうしたのよ……」

「なに簡単なことだ。

お前のことだから、後釜は見つけてあるのだろうが、やはり自分が管理した方が確かだろう？」

そこで取引だ。私の言うことを聞けば、畏れが無くとも寿命までは生きれるようにし

てやろう」

「何を…… 言っているの……!?」

「それで? 『はい』か 『いいえ』か…… どっちだア?」

「…… わかった。受け入れるわ」

とても悔しそうな顔です。

…… あれ?なんでこんなスムーズに取引できているんだ?

「そうだろうな。良かったじゃないか。だからもうそんな顔はするんじゃない。

私の要件は2つ。

一つ目は、私の邪魔をしないで欲しい。

二つ目は、私の館に来る客人達と、私の子孫に手を出さないでほしい。どうだ? 簡単だろう?」

「ええ、そうね。それで良いのなら……」

「取引成立だ。

では、私から。『八雲紫は畏れの不足で死ぬ? いや。畏れが無くとも寿命までは生きるだろう』」

能力を使い妖怪に課せられた畏れの縛りを破った。

俺がしたわけじゃ無いぞ。

「本当に…… 体の調子が良くなつたわ…… !!」

「私も自身に掛けていているからな。効果は折り紙付きだ」

「…… ここまでされたら、もう破るわけには行かないわよね」

「win-winじゃないか。何をそんなに不満そうにしている。」

「…… もう、私は帰るわ」

「ああ。自由にするといい」

そう言つて、八雲さんは裂け目に帰つて行つた。

なんだか、やばいことした気がするなあ。

## 八雲紫 side

取引をさせられた。彼と、彼の周りに手を出さないと云う内容で。

しかし、取引の最中、頭が上手く回らなかつた。

本来考えつく様なことも浮かばなかつた。

それに、死に対する覚悟も揺らいでしまった。

何故だ。何故、何故、何故。

…… そうか。また、私は彼に嵌められた。  
「能力で、私の思考を、制限したのね……!!」  
この取引は、私の負けが確定していた様だ。

## 第10怪 観光スポット：真つ赤な館

さてさて、荷造りOK

心の準備OK

「うう……あたしは寂しいよ……」

留守番、OK!!

観光の準備はできた。

見てわかるとおり正邪ちゃんは留守番です。

正邪ちゃんにはやつぱり家を守ってもらわなきゃ。

変な妖怪が家を『もつと燃えるがいいや!!』とかして来た時の為のセコムとして。

小僧派手にやるじゃねえか!!

そのさい正邪ちゃんにはドーピングをしておいた。

以前チルノちゃんにやったあれだ。

所謂EX化である。夢があるね。

元がどれ位かも分からないし、今も測れないけど、まあ心配する程じゃないと思う。

「それじゃあ行ってくる」

「ああ。気を付け……なくても大丈夫か。ご先祖なら」

この子は俺を何だと思ってるんですかねえ……。

俺はただの天邪鬼だぜ。

「土産があれば持って帰ろう」

「土産話だけでも良いけどね」

そう軽く交わして、俺は飛んだ。

前ほど馬鹿みたいな速度じゃない。

気付かれない様にこっそり（爆速）と行っている。

数秒もせずに到着。

さて、どうやって入るかだが。

「…… 気まずいんだよなあ」

あの、天井ぶち破っちゃったし、メイドさんは吊り上げちゃったし……。

そこに天啓が。

「ピロピロ!!」「ピロピロン♪」「ピロロン!!」

元気に庭をお掃除する妖精達が外からも見える。

「…… zzzzz」

オマケに眠る門番も。

俺が思いついた作戦はこれだ。

「私の姿はこの様な物じゃない。あの妖精と瓜二つだ」

そう!!メイド妖精として忍び込むのだ!!

「ピロピロ」

普通の言葉が喋れなくなった。

手や足も小さくなった。ほっぺは柔らかい。

上手く妖精になれたので、早速侵入しよう。

館の中に上手く入り込んだ。

前も来たが壁も床も真っ赤だな。

少し気分が悪くなりそう。

適当に漂っていると、前からメイドさんが歩いてきた。

「………… 貴女、どこの掃除担当かしら？」

「ピロピロ」

「何を言っているかわからないわ」

そりゃそうだ。妖精だもの。

「…………… まあ、貴方達に何を言ってもわからないわよね」



軽くため息を付くメイドさん。

確か名前は咲夜さんだっけ？

「早めに戻るのよ？」

そう言っ行って行ってしまった。

とりあえずバレずに済んだ。

それでは安心して探索を続けよう。

大きな扉を見つけた。

開けてみると、莫大な量の本と本棚が並んでいた。

ここは……『大図書館』か。

となるとここに居るのは十中八九……。

「……………」

紫色の髪をしている女性が静かに本を読んでいる。

パチエリー・ノーレッジ。別名『七曜の魔女』

または、『動かない大図書館』『ムキユー』

声を掛けてみよう。

「ムキユー」

「……………」

無視しているのか気付いて無いのか。  
これ以上邪魔するのもあれなので出よう。

次に来たのは、階段を上がった上にある扉の前。

開けてみると。

「おねーさまー♪」

「ちよ、フラン!?今仕事中のんだけど……」

「…… おねーさまのお仕事って鏡の前でカツコつけることなの?」

「うぐっ!!そ、それは、あの、そう!!紅魔館の主としての威厳を!!ね!」

「はいはい」

百合百合が展開されていた。

扉をそつと閉じた。

館の中をあらかた散策し終わり、門の前に来た。

未だグースカ寝ている門番が1人。

伝えたいことがあるので起こさせてもらおう。

「ぽろぽろ」  
「ペシペシ」

「ムウ……。咲夜さん……？」

目を擦りながら寝ぼける門番。

…… 少し驚かせてやろう。

「ん？妖精ですか？」

「ピロピロ」

心の中で念じる。

私の姿は妖精ではない。以前の物だ。

「え？」

「あのメイドに伝えて置いてくれ。今度は、客人として招かせてもらおうとな」

そうして飛び去った。

後ろから門番の絶叫が聞こえてくる。

さて、次はどこに行こうか!!

## 第11怪 観光スポット：太陽の花畑

紅魔館から離れていくばくか。

途中で色々聞きながらある場所に向かっていた。

なんでも、そこには辺り一面の花畑。

とても良く手入りされていて、眺めるだけなら絶景だそう。

……そう、『眺める』だけ、ならば。

少しでも足を踏み入れれば、花畑にまた一つ、真っ赤な花火が上がると言う。それを成すのは一人の女性。

危険妖怪『風見幽香』

別名、『四季のフラワーマスター』

……まあ？ 敵対する気なんてありませんが!!!

花畑か……。楽しみだな!!

「さぞかし絶景なのだろうな!! フハハハ!!!」

「あやや!? 何ですかあのスピードはあ!?」

ん? 何か聞こえたか? 気のせいかな。

さて!! 目指すは太陽の花畑!!!  
風見幽香の住処へいざゆかん!!

「……ここだなつと」

適当な木の上に立つ。

それとなしに前を向くとそこには……。

「これは…… たまげたなあ……」

広がるのは花、花、花。

広大な広さに綺麗に並べられた黄色い花。

それも、全てが太陽に顔を向けている。

向日葵。それもかなり背が高い。

人1人は軽く隠れられるだろう。

「もう少し近くで見えるか」

そう思つて、木から飛び降りる。

しかし、それが間違いだった。

「よつと」

着地した場所は、まるで分けられてるかののように、ハッキリと土の色が変わった場所だった。

「あら、また人間かしら」

そして、近くに居た日傘を差した緑髪の女性と目が合う。

「……………」

「……………な、何よ」

ま、まさか……………」

内心混乱しまくっている。

た、確かここに住んでる妖怪って女性だったよな……………」

「まあ、良いわ。

どうせ消えるんですもの」

その直後、空間を裂く様な蹴りが俺の首めがけて飛んできた。

「挨拶も無しにいきなり足を出すか……………」 なってないな」

俺はそれを、反射で出した片手で軽く止めていた。

「あらあ……………」 珍しいものね」

嬉しそうに嗤う女性。

「申し遅れた。私の名は天鬼だ。お前の名は？」

「死ぬ予定の奴に名乗る名は無い……なんて普段は言うのだけれど。どうもそうはいかないみたいね」

笑みが深まる。

獰猛な、とてもとても楽しそうな笑みに。

「私の名前は風見幽香。四季のフラワーマスターなんて呼ばれているわ」

あ、これ、ダメなやつだ。

こんな時の為のなるようになれの体制を取った。

「そうか。お前が風見幽香か。誤解しているのだろうが、別に私はここを荒らそうなどとは思っていない」

「知ってるわよ？でも入ったのなら等しく私の獲物よ」

「そうか、運が悪かったようだ」

「ええ、そうね。運が悪かったみたいね」

風見幽香の足に力が入る。

ミシミシと嫌な音を立てるも、微動だにしない俺の手。

「ただこの向日葵畑を観光しに来ただけなんだがな」

「……ヒマワリ？」

足から力が抜けた。

まさか、知らなかったのか!?

「知らないのか?この花の名前を」

「ええ。偶然種をもらって気に入った物だから」

それじゃあ仕方ないね。

親切な俺が教えてあげるとしましょう。

「そうなのか。この花の名は向日葵。字は向かう日の葵と書く」

「へえ。sun flowerじゃないのね?」

うわあ凄いネイティブ発音。

「そうとも言うが、向日葵の方が響きがいいだろう?」

「そうね。良いことを聞いたわ。ありがとう」

そう言って足を退ける。

ふう、やっと話を通じたか

そう思ってた前の花畑を見やる。

「……ッ!!」

すると、次は先程よりも勢いの乗った蹴りが風見幽香から放たれた。

「……………」

しかしこの体は何か思うようなこともなく、腕を払うだけで蹴りを押し返す。



「あらっ、やっぱり、貴方只者じゃないみたいね」

「そうだな……。では、お返しでもどうかかな？」

そう言つて、今度は俺が蹴りをかました

「なっ!？」

風見幽香は、ガードは出来た様だが、体は軽く上空へ吹き飛ばされた。

蹴りの衝撃で花畑が揺れる。

……ええ（ドン引き）

「……はあ、わかった。やめにしましよ」

そう言つて、風見幽香はゆっくり空から降りてきた。

「勝てそうにないもの」

「それもそうだろう」

天邪鬼最強説。

まあ俺が強いわけじゃ無いんだが。

「あの子達の名前を教えてくださいました礼よ。あの子達を傷つけないなら、自由に見ていつて」

「ああ、そうすることにしよう」

その後、花畑を見回ったあとに、風見幽香に挨拶をして去ろうと思った。

「これ、あげるわ」

「これは、向日葵か」

風見幽香が、一輪の向日葵をくれた。

「良いのか？」

「ええ、貴方の元に行きたいって言い出したのはその子だもの」

「どうやら風見幽香は花の声に分かるらしい。」

「そうか、良い土産ができた。また来よう」

「ええ、いつでもどうぞ」

俺はその場をゆっくりと飛び去った。

# 第1 2 怪 観光スポット： 神住まう神社 そして帰宅

花畑から館に帰る途中、話に聞いた守谷神社が見えたので寄っていくことにした。  
敷地内にダイレクトで着地。

もちろんそつと。

なんだか、ここの空気肌に痛い気がする。

「いらつしやいませー」

ここは店か。そんなツツコミを喉の奥にしまう。

「信者の方ですか？」

笑顔で対応するこれまた緑髪の女性。

多いな、緑髪。大妖精もそうだし。

「いや、信者ではないんだが、話に聞いたので帰る途中に寄ってみたのだ」

「そうだったんですか。それでは、こちらへどうぞ♪」

手招きされたので付いて行ってみると、大きな建物……なんて言ったか、あの賽銭箱の後ろにある建物の前に来させられた。

しかし空気が痛い。叩かれてるようにビシビシした痛みが……。ああん♡これはキモイな。変な誤解を招きそうだ。やめよう。

「せつかく来たんですから、拜んで行ってください!!」

凶々しいなこの巫女さん。

「(こ)守谷の信者になれば、土地は恵まれ、奇跡が起こり、不安も取り除かれるでしょう!!」

自信満々に言うな。

まあ幻想郷には本当に神様も居るようなので、嘘でも無さそうだ。

「あいにくそういうのには興味が薄くてな。信じておくかと言うほどの関心しかない」

「ああ、最近の人はそんな人が多くなってきて困るんですよ。」

うんうんと勝手に頷く巫女さん。

「これは見せた方が手っ取り早いですね!!ご覧あれ、これが守谷の奇跡です!!」

そう言った瞬間、天候が変わった。

さんさんと輝いていた太陽が雲に覆われ、姿が見えなくなつた。

それも、『守谷神社の敷地内だけ』。

なるほど、確かに奇跡だ。

「これは凄い。しかし、あいにく神に祈っている様な暇がない身でな……」

「そうですかあ、無理は言えませんがもんね」

すると、雲が嘘のように去っていった。

と、そこに

「早苗く、お腹すいたよ」

フワフワと帽子を被った少女が来た。

「諏訪子様あ……はあ。」

巫女さんはなんだか残念そうにため息を吐いた。

様付けをしているとなると……この少女が神様か？

「あれ？その人は？」

「帰る途中でここに寄った参拝客の方です。すいません、これでも神様なんです。これ

でも」

「これでも……」

巫女さんに怒られて落ち込む神様とかシニールだな。

「いや、良い。私が知っている神もおおかたそんな物だ」

「そんな物……」

あつと、追い討ちを掛けてしまった。

もう完全に肩を落としてしまっている。

「なんだか申し訳ない。」

「すまないが、もう行かなければ。気が向いたらまた来よう」

「そうですか。気を付けて帰ってくださいいね？」

その声を最後に、飛び上がって帰路に戻った。

「早苗、危なかったね」

「なんでですか？」

「あの妖怪、とんでもない奴だったよ」

「へ？」

何やかやで館に戻ってきた。

「今戻った」

「おかえりなのだー」

「遅い!!早くアタイと遊べ!!」

「チルノちゃん!!…… おかえりなさい。天鬼さん」

館に入るといつもの3人が出迎えてくれた。

「戻ったかい、ご先祖」

遅れて正邪ちゃんも。

「ああ、ただいま」

いやあほんと、自宅って良いね。

「はあ!?!あの花畑に行ったあ!?!」

現在、正邪ちゃんに土産話をしていた所、急に驚かれた。

花畑に行っただけなのに。

「何をそこまで驚く」

「驚くよ!!あそこには風見幽香が居るんだ!!」

「ああ。色々と話したよ」

「話したって…… はあ、もう何も言わないよ」

何故か呆れられたんだが。

「そこで向日葵を1輪貰ってな。これだ」

持っていた向日葵を見せた。

「確かにあそこに咲いている花だね…… いやあ驚いた」

なんだか少し悟った様な表情をしている正邪ちゃん。

「ご先祖だけは敵に回したくないね」

そしてこんなことを言ってきた。少しシヨックだ。

人を化物かなにかと勘違いしてないか!?

向日葵は小さな花瓶に活けている。窓辺から射し込む太陽の光で、とてもキラキラし

ている。



## 第13怪 お客

ティーカップを傾け、窓辺でゆっくり読書。

「ここだけ見れば優雅なお昼だろう。」

「アマキー!! 暇ー!!」

「チルノか。たまにはこういうのも良いだろう」

「そうだよチルノちゃん。少しはゆっくりしようよ」

「△○♪#!」

実際は結構騒がしいけどな!!!

「ところで大妖精」

「なんですか?」

「何故この妖精は私の頭に乗っているのだ?」

「..... さあ?」

「♪」

俺の頭の上には、ドヤ顔で俺の頭にしがみつくと妖精が居た。  
気に入ったのか?

「とにかくアタイは暇なの!!」

「お菓子はあるか?」

「いるー!!」「ピロリピロピロ♪」

「なんだい騒がしいねえ。ご先祖、どうにかならんかね?」

「無理だな」「分かってた」

のんびりしたいいつもの日常。

俺はこういうのも好きだ。

1人で居るのも好きだが、こういう暖かい雰囲気も好きだ。

「ごめんください」

そこに、いつもとは違う客人が来た。

「失礼いたします」

「ああ、くつろいで行ってくれ」

来たのは3人。

銀髪のメイドが一人。

「へえ、結構立派ね」

「それもそうだろう。私が建てたのだから」「ええ!？」

日傘を差し、蝙蝠の様な羽根を生やした青髪の赤い目の少女が一人。

「あまきー!!」

「おお、久しぶりだな。フランドール……で良かったか?」「フランが良い!!」

同じく日傘を差し、宝石の様な羽根を生やした金髪の少女が一人。

言うまでもなく、紅魔館の面子である。

「あなた、この前邸に無断で入ったんですって?」

「私だけか?あの白黒魔法使いはどうなのだ?」「グッ……痛い所を……」

セキリユティガバガバである。

「まあ、入られたこっちにも落ち度はあるわよね……主に門番に」

それでいいのか紅魔館。

良いのだろう。特に気にしてないようだし。

「今回来たのは、貴方が勝手に邸に入ったと言うことで、それなら私達も行つてやろうと思つたからよ」

ふんすつと威張る可愛い吸血鬼。

「そういえば、あのパチエリーと言つた魔法使いはどうしたのだ?」「聞きなさいよ!!」

それを華麗にスルー。ああいうのは流すに限る。

「パチユリー様です。あの方は、持病の喘息で寝込んでいます」

『お大事に』と伝えておいてくれ」「わかりました」

パチユリーだったのか……………

衝撃の事実である。

そういえば、フランちゃんはどこに……………？

「フランちゃん!!一緒に遊ぼう!!」「チルノちゃん居たんだ!!遊ぼう!!」「私も居るよ

!!」「大ちゃん!!」「ちよ、フランちゃん!!抱きつかないでえ!!」「大ちゃん恥ずかしそ

!!」

知り合いだったのか。仲が良さそうで何より。

しかし、急に一段と騒がしくなったなあ。

家は広いから、鬼ごっこでもかくれんぼでも、狭いなら地下にでも広げればいいので、

存分に楽しんで欲しいものである。

「フランが嬉しそうで良かった……………」

暖かい目でフランちゃんを見守るレミリア。

いいお姉ちゃんだなあ。

「今回の訪問も、妹様が行きたいと仰ったからですものね。お嬢様」

「咲夜!!それ言わない約束でしょ!?!」

「あら、申し訳ありません」「ぐぬぬぬぬ……」

楽しそうな主人と従者。

就職するならこんな職場が良いな。

「………… 入りたい」

正邪ちゃんの寂しい呟きが聞こえた。

入れば良いのに…………。

???  
s i d e

ある妖怪に関することを書くように言われたので、聞いた情報を元に縁起に書き記している。

「で、できたあ…………」

膨大な量のデータを元に、ようやく書きあげることが出来た。  
なかなかいい出来である。

変な部分も無し。

疲れたので少し休むことにする。

天鬼

危険度：最悪

種族：天邪鬼

性別：男※1

特徴：天邪鬼の祖で、現在存在する天邪鬼の親の様な存在。

少し尊大な口調。しかし、能力(後記)のせいで見極めがとてつもなく困難である。600年程前に、1度妖怪の賢者の手によって封印されたが、それを破り、現在は湖の近くに館※2を設けているようである。

そこには、氷の妖精や大妖精。人喰い妖怪や彼の子孫である天邪鬼を招いているようである。

噂によると、少女ばかりを招いている所から、小児好き。 ※3

能力：拒絶する程度の能力

あらゆる事象や状態、生命までもを拒絶し、自分の勝手の良いように書き換えることができる。

もはや化け物である。

容姿：能力によつて姿形を変えるので、不明。

※1 男以外の姿になつたことないことから、女にはなれないと思われる。

※2 能力によつて、そこに『館が無い』ということ自体を拒絶し、『館がある』という事実に書き換えた。簡単に言うとは、無から有を生み出した。

※3 確定したことではないので、注意されたし。

## 第14怪 観光スポット：貧乏神社　そしてちよっかい

紅魔館組と適当に話して、さつき帰ってもらった。

チルノちゃんとフランちゃんが「もつと広くして!!」なんて言うものだから気合い入られて地下ホールを三つ作ってやった。なぜだか、妖精達が喜んでいた。

「…… あんたにはつくづく驚かされるよあたしは」

「子孫や友人のことを思つての、私からの贈り物でもあるんだがな」

「規模を考えろ規模を!!」

正邪ちゃんに怒られてしまった。悲しい。

なので気分転換に、幻想郷に来た際に一度足を踏み入れたあの神社に行くことにした。

名前は博麗神社。幻想郷を覆う結界の守護を任されているらしい。

重役じゃないか。

博麗神社の少し上空まで来た。

なにやら、座って八雲紫さんと話し込んでいるようだった。



…… 少し悪戯してみるか。

待っていると、話が終わったのか八雲紫さんはスキマ（と言うらしい物）を開いて帰っていった。

よし、悪戯開始だ。

「私の姿は今の物じゃない。八雲紫と同じ物だ」

すると、服も変わって八雲紫さんそっくりになれた様だ。

焦っている様な表情をしてと…… よし!!

霊夢 side

紫がスキマを開いて帰っていった。

なんでも、天邪鬼の天鬼…… この前神社を襲ってきたあの天邪鬼とその周りに手を出すなど言われたらしい。

紫が言いくるめられるなんて、珍しいこともあったものだ。

「ま、あたしには関係無いけどね」

一人お茶を飲みながら呟く。  
そこに……。

「霊夢!!」

上空から、先ほど帰ったはずの紫が、とても焦ったような表情で迫ってきていた。

天鬼 s i d e

「霊夢!!」

「ゆ、紫?!」

おお、驚いてる驚いてる。

ん?なんでこんなことしたかって?

それは……

「今、ここに私が来なかった!」

「え、来たけど…… どうしたの一体」

「そいつが天鬼よ!!」

カリ○ストロの真似がしたかったただけだ!!

「ええ!? お、女にはなれないんじゃないの!？」

え? そうなの?

「私の間違いだったのよ……。なにか言われた?」

「あいつの周りに手を出さないように……。」

「そうなの…… 良かったわあ」

わざとらしく膝を崩す。

「私も今それを伝え来たのだけど…… まさか自分で言いに来るなんて」

心底ホッとした表情をする。

その後少し話すと、霊夢が「あんたも大変ね。お茶出してあげるわ」と、哀れみの目を向けながら奥に向かった。

「…… さて、正直ここにいる理由はもう無くなったのだが」

八雲紫さんの綺麗な声でそんなことを言う。

あ、そうだ。前に迷惑掛けちゃったから何かしてあげよう。

「博麗神社の賽銭箱は空じゃない。溢れんばかりの賽銭で埋まっている」

以前、博麗神社の巫女はお金に困っている様だったので賽銭箱を一杯にしてやった。

感謝するが良い、博麗の巫女よ!!

あとは手紙を書いて、その場を立ち去った。

霊夢 side

あの後、紫の話を聞いた。

流石にかわいそうだと思つて、お茶を出してあげることにした。

「紫、あれ？紫？」

呼んでも返事がない、どうしたのだろう。

「ん？手紙？」

紫が座つていた場所に、薄い紙が一枚石を重しに、置いてあつた。

「なにになに……？」

『博麗霊夢へ』

先に言おう。騙して済まなかつた。

先程いた八雲紫は、私、天鬼だ。

以前の件で謝罪しようとしたのだが、面と向かつて話し辛かつた。

ので、少し驚かせる様な形でお詫びをしようと思つた。

賽銭箱を見てくれ。それが、私からの謝罪の気持ちだ。』

賽銭箱!?もしかしてお賽銭でも入れてくれたのかしら!!」



## 第15怪 観光スポット：迷いの竹林と、永遠亭

博麗神社へのちよっかいを終えて、少し楽しい気分になっていた時、こんな話を聞いた。

『迷いの竹林のどこかに、優れた医者 of 居る診療所があるらしい』

その名を、永遠亭。

迷いの竹林と言えば、あのノリのいい少女が居たところだ。

早速行ってみることにした。

あれから会えていないから、少し楽しみだ。

迷いの竹林に突撃したのは良いのだが、結局迷ってしまった。

くそ!!景色が同じで方向感覚が狂う!!

と、そこに運良く人に出会った。

頭からうさぎの耳を生やしている人に。

……  
みんなのアイドルで有名な某I○製作者の天災ですかね？

「すまない。少し道が聞きたいのだが」

「あ、はい。どちらまで？」

「永遠亭という場所なのだが」

とりあえず声を掛ける。

「永遠亭でしたら、今から私も帰るところなので、一緒に来ますか？」

「そうしてもらえるとありがたい」

どうやら永遠亭の人だったらしい。

うさぎ耳の後ろを付いていくことしばらく。

「着きました!!ここが永遠亭です!!」

立派な門が開くと、そこにはたかさんのうさぎ耳の少女が居た。

「頭痛薬はどこだったうさぎ？」「それならここを右に行つた2番目の部屋だったうさぎ」「う

さうさぎ。ありがとううさぎ」

せつせこせつせここと慌ただしく働くうさぎ耳達。

なんだか見ていてほっこりする。

「今日はどんな用事で来たんですか？」

「強いていえば、ここに興味があつたからと言うのと、お世話になるときのための確認と

言う所だ」

「そうだったんですか。それでは師匠の所へ案内しましょうか？」  
「頼む」

またまたうさぎ耳の後ろを付いていくこと少し。

「師匠!!お客さんですよ!!」

「あら、患者じゃないのね」

「ここに興味があつたらしいですよ」

赤と青のチャイナっぽい服を着た女性が居た。

「初めまして。永遠亭の医者の方、八意永琳と言います」

「私は天邪鬼の天鬼だ」

「あ、天鬼……?」

「どうしました?師匠」

「いえ、どこかで聞いたことがあるものだったから」

同じ名前前の別人でも居るのだろうか。

まあ『天木』なんてどこにでも居そうな名前だわな。

そんな風に軽く自己紹介して、少し見回ることにしよう。

と、思ったのだが……。

「うさうさ」「うさく……」「ちよつとそつち寄るうさ」「もう寄れないうさ」……  
Z  
Z



ZZZ「暖かいうさ」「スンスン……なんだか落ち着く匂いうささ」「ここは私の場所うさ」「頭の上は乗り心地が良いうさね」「もうずくるところしてたいうさあ……」

何故かうさぎ耳達に懐かれてしまった。

「あらあら、まるで毛玉ね」

そう言つてクスクス笑う永琳さん。

「暖かそうですね」

そんなこと言つてないで助けてください。

「……うささ……」

可愛いから無理矢理引き剥がせないのだ。

「何故こんな事になったのだ……？」

「ん〜♪撫でるの上手いうささ♪」

「……あ、ずるいうさ!!」「……」

結局、うさぎ耳達が離れてくれないせいで、帰るのは夜になってしまった。

永琳 side

あれから、うさぎ達に包まれる天邪鬼の男を見つめながら、考え事をしていた。

天鬼……天鬼………。

どこかで聞いたことがある様な……。

それこそ、記憶が薄くなるほどの昔の記憶………。

まあ、いつか思い出すでしょう。

今はとりあえず、うさぎ達に包まれて毛玉になっている天邪鬼を見ていることにしよう。

博麗 side

「え、ええ!?!天鬼がお、女になった!?!」

「そうよ。あんた、嘘言ったんじゃないでしょうね」

ギロリと睨む巫女のごとは気にならず、それよりも頭を抱える管理人。

「そんな…… 天鬼が、女に…… しかも、私に……」

「な、なによ。そんなにマズイことなの？」

「マズイも何もあつた物じゃないわ!! 天鬼は…… 天鬼は…… !!」

そして巫女は、管理人が発した言葉に言葉を失った。

「天鬼は、変化した人物の能力も使うことができるのよ?!?」

ここに、新たななる壮大な勘違いが芽吹いた。

## 第16怪 穏やかな1日

「あまぎー、お腹空いたー」

「ふむ…… もうそんな時間か……？」

少し外を見ると、もう太陽が真上に来ていた。

もう昼か……。

「わかった。チルノ、大妖精と正邪も呼んでおいてくれ」

「わかった!!アタイに任せて!!」

ルンルンと鼻歌を歌いながら部屋から出ていくチルノ。

「ふむ…… 何を作るか……」

メニューを何にするか考えながら、俺も部屋から出ていった……。

「…… フフツ、可愛がって貰ってるみたいね」

飾ってある向日葵の前で、誰かが微笑んだのに気付かずに。

さーて何作ろうかな!!

「ふむ、あるのはこれだけか…… 足りるか?」

そこには野菜類と少しばかりのお肉、そして何故かあったコンソメスープの元だ。

……ん?これ普通にコンソメスープ作ればいいやん。

「パンもあつた筈だ。残つたなら夜にでも出せばいい……。我ながら良い考えだ」

「あら、美味しそうな匂い」

後ろから、微笑む緑髪が……。

「あまきー!!はーやーくー!!」

「チルノちゃん!!静かに!!」

「騒がしいな全く……」

机には既に、チルノと大妖精、そして正邪ちゃんが座っていた。

「お邪魔するわよ」

「「!?」」

ん!?

「む…?」

そして自然な動作で食卓に付く緑髪。

風見幽香である。

「あれ!?幽香さん来てたんですか!？」

「幽香だ!!」

「か、風見幽香あ!？」

あ、正邪ちゃんが転げた。

あの幽香さんや、いつからここに？

「あなたが何作ろうか迷っていた所からよ」

最初からじゃないですかヤダー!!

ビツクリさせないで欲しい。

「私は花を経由して移動できるのよ。あなたに向日葵をあげたのは、そういう理由も

あつてよ」

そうだったんだ。

今度からは普通に玄関から来てね。

「あの子を可愛がってくれてるみたいで良かったわ。あの子も、張り切って種を残そうとしてたわよ?」

そうなのかー。

花壇作らなきゃ(使命感)

「となると、花壇が必要だな」

「ええ、そうしてくれると私も楽だわ」

「早く食べようよ!!」

おっと、話し込んでしまった。

「「ごちそうさまでした!!」」

「はい、お粗末様でした」

「待て、作ったのは私だ」

「あら?食材を買い込んだのは私よ?」

んん?あの食材って幽香さんが買ったのか?

……  
なんで?

「なんでって…… 私達は夫婦でしょう?」

……ん?

「ええ!?!」「……?」「夫婦う!?!」

おいー人理解してないぞ。

「そんな覚えは無いぞ」

「そりゃそうよ。今決めたんだもの」

「…… なにか訳ありか?」

「訳ありって程じゃないのよ」

話を聞くと、人形使いのアリスに「幽香って結婚できるの?」と言われたので「結婚するならあの天邪鬼が良いわね」という話になったらしい。

そこからアリスが「じゃあもうしちやいなよ!!」と提案してきたので、その気になったらしい。

何を言っているのか (ry

「つてことで、これからお世話になるわね?」

「いやいやいや!!ちよつと待て!!!」



そこに正邪ちゃんが待ったをかける。

言っただれ正邪ちゃん!!

「家は花畑から離れてるんだぞ!?!どうする気だよ!!」

「あら……」「考えてなかったのか……」

結構アグレッシブな人らしい。

その後幽香さんは、「その気になったら声をかけなさい」と何故かドヤリながら帰っていった。

なんだったのだろう。

そんな風に今日も1日が過ぎた。

なんだかおかしな日だったな……。

……ん? ちょっと待て。

『今日結婚を決めたのなら、何故食材は買い込まれてたんだ』……!?

「……フフツ」

そこからの記憶は無い。

覚えているのは、光の無い真っ赤な目をした、緑髪の女が上気した顔で俺に迫ってきている場面だけだ。

それから、3日くらい眠れなかった。

## 第17怪 天邪鬼、弾幕を覚える

「うゝむ……」「なにしてんだ？」

1 人部屋で考え込んでいると、正邪ちゃんが後ろから顔を出してくる。

「ああ、少し悩みがあつてな」

「ご先祖に悩み？ 一体どんな悩みさ」

正邪ちゃんが膝に座りながら聞いてくる。

いや…… ね？

妖怪（元人間だが）としては恥ずかしいのだが。

「実は、私は妖力弾を作ることができなくてな……」

「へ？」

あの、そんなほうけないで。

悲しいからア!!!

「はあ…… 意外だねえ。ご先祖にそんな悩みが」

「どうにも、私の妖気は霧のように拡散してしまつてな」

「ふーん……。難儀なもんだね」

「どうにかできないかと悩んでいたのだ」

ほら、以前チルノちゃんと魔法使いの弾幕あつたでしょ？

凄い綺麗だったからさ。俺もしたいなーとなつたわけだ。

「……あのさ、ご先祖」

ん？どした？正邪ちゃん。

なんか凄い呆れたような…… また お前か みたいな顔してるけど。

「自分の能力思い出してみなよ」

能力って…… 拒絶する程度の能力でしょ？

……… あ。

「あのさあご先祖」

何故か肩に手を置かれた。

「あんたの能力いつもいつも反則すぎなんだよ」

そしてこれでもかと耳元で声を出された。

!!!!!!

「私が妖力弾を作れない？そんなわけない」

早速妖力弾が作れない現実を拒絶する。

「じゃあ早速1回作ってみなよ」

そう言われて手に妖力を集める。

すると妖力の弾が出てきた。

「できたじゃないか。そういえば弾幕がしたかったんだよね。それじゃあスペルカードも作らなきゃね」

と、言うわけで。

「3枚作ったが……」

「それじゃ見せてみてくれよ」

ワクワクと言った感じでこちらを見てくる正邪ちゃん。

それじゃ、俺張り切っちゃおうよ!!

「言い忘れたが、少し相手になってくれ」

「……へ？」

よし行こう!!!

「1枚目だ。」

【逆札】リバース・オン・リバース」

「おあつとお!？」

スペルカードの発動を境に、重力が、視点が、はたまた天地がひっくり返る。今俺達は、地を見上げ、空を見下ろしている状態だ。

このスペルカードの能力は、相手の感覚を全て逆にするものだ。

右に動こうと思ったら左に動き、上に行こうと思えば下に行く。逆も然りだ。

そして最大の特徴はこれだ。

「な、なんだい!?!あたしは弾幕をちゃんと避けた筈なのに、『避けたはずの方向から同じ弾幕が』……!?!」

何を言ってるのかわからないと思うので少し説明だ。

これは相手の感覚を全て逆にするものだ。

そう、『全て』だ。

「そうか!!あたしの視覚が捉えている光景も、上下左右逆になっているのか!!」

そう。つまり正邪ちゃんは

「あたしから弾幕に突っ込みに行った形になる!!?!」

そういうことだ。

へピチューン

よし、2枚目行こう。

「2枚目だ。」

【鬼札】鬼人行進」

「今度はなんだい!?!」

正邪ちゃんの周りに結界が貼られる。

「これは簡単なことだ。」

「放たれて過ぎた筈の弾幕が、結界に跳ね返ってる!?!」

そう。さながら箱の中のスーパーボールの様に、画面外に過ぎることなく結界の中を縦横無尽にはね回るのだ。

「ちよ、まだ増やすのかい!?!」

俺は少しずつ弾幕を増やして追い詰めるだけだ。

へピチューン

よし、最後だ。

「3枚目だ。」

【天邪鬼】起死回生の逆転劇」

これはマジでピンチになった時の使うようにする。

「こ、今度は何が……ん？」

何も起こらない。それもそうだ。

「すまん。まだ下準備中だ」

そう言つて、俺は手に妖力弾を一つ作る。

そこに、ありつたけの妖気を籠める。

「正邪、忠告しよう。『絶対に避けるんだ』」

「いつ!？」

不味いと思つたのかすぐに離脱する正邪ちゃん。

溜めが終わつたので、妖力弾を構える。

「しかと見るがいい。これが私、『邪なる天の鬼』、天鬼の全力だ」

そして、思いつきり妖力弾を撃ち出す。

綺麗に真っ直ぐな線を描いて弾き出された1個の妖力弾。

それは前の山に直撃し……………。



爆発すると共に、周囲の山を一概に消し飛ばした。

「ふむ……。実際使うならもつと威力を下げなければな」

あ、山は能力で戻しました。

## 第18怪 観光スポット：キノコの森

「……完全に迷った」

俺は今、瘴気と魔力が溢れる『魔法の森』という場所に来ていた。

来た理由はいつも通り観光だ。

人里に向かう途中の行商人さんから話を聞いて来た。

その行商人さんは俺がお礼として無事人里に送り届けた。

さて、話を戻す。

魔法の森に来たのはいいのだが、同じような景色と面白そうなキノコ達に目を奪われ、森の奥までズンズン進んでしまった。

話によると、この魔法の森にはたまーに人里で人形劇を行う人形遣いの少女が居るらしい。

その少女は、善心からこの迷った人間を案内して返すというらしい。

が、しかし。この森に来て（体感だが）2刻……つまり、4時間が経とうとしている。

一向にその少女は現れない。その少女と話すのも目標の一つだったのだが……。

え？飛べばいいって？俺がいる魔法の森の奥深い所は、木が大きく育っており、見上げれば木の枝が交差して天井を作っているのだ。

つまり、空への逃げ道がない。

暗いし。明かりは光るキノコが点在しているため、それが照明のような役割をしている。

無理やり壊すのも頂けない。

木の枝を折ってしまえば、そこから病気になったりする。

あまり気にするようなことじゃないかもしれないが、話に聞く少女に迷惑がかかるかもしれない。

「さて……どうしたもんかなー」

近くに人が居ないため、普通に喋れる。

こういうのも久しぶりだな。

いつもはルーミアちゃんやチルノちゃん、大妖精ちゃんや正邪ちゃんが居るから、普段の喋り方があの変な風なのになっている。

「……まあ、いつか。とにかく歩こう。さすれば道は開けるだろうな」

あり？また喋り方が……。

つまり、誰かが近くにいるということだ。

そう考えていると、

「あら、こんな奥深くに何か用かしら？」

後ろから女性の声でした。

「迷ってあんな奥に入り込むなんて。貴方、結構度胸があるのね」

迷ったことを伝えたら、「なら付いてきなさい」と言われ、付いて行ったら家に案内された。

疲れているのがわかったのか、「お茶でも出すわ」と世話を焼いてくれた。

いい子じゃん。気遣いができて。

それとこの子、魔法使いらしい。

「貴方が居た場所はね？森の瘴気が強すぎて魔法使いでも半端者なら倒れるくらいにキツイ場所だったのよ？現に私もあそこに長時間居座るのは辛いものがあるし……」

注意喚起だろうか。

嬉しいね。人に気遣ってもらえるのって。

俺の周りには俺を超人扱いする奴らしか居ないからな……。

『俺なら何があっても大丈夫』って思ってるのだろうか。心配をしろ心配を。

俺は元とはいえ普通の人間だぞ。

「で？なんで貴方はあそこで平気だったの？見たところ普通の人間にしか見えないわよ？」

ありや、そこに行き着くか。

「この姿は仮のものでな。とある事情から人間の姿の方が都合がいいのだ」

「それって指名手配とか？」

「まさか」

「じゃあなに？夜逃げかしら？」

「私が借金をするように見えるか？」

「そう？人は見かけによらないものね。あら失礼。人間じゃなかったかしら？」

何この子。凄い突っ込んでくる。

やっぱり魔法使いというのは好奇心旺盛なのか？

好奇心は猫をも殺すということわざくらい知ってそうだが……。

「自己紹介が遅れたな。私は天邪鬼の天鬼だ」

「……どっかで聞いたわね。貴方、もしかして本当に指名手配犯？」

「人聞きの悪いことを言わないでもらおう」

え？なに？俺って結構有名なの？

「シャンハイ」 「ホ、ホウライ……………」

ん？何この子達…………… 人形？

「その子達はシャンハイとホウライ。言うなれば、私の家族よ」

人形遣いだからか。自分の意思を持った人形か。

表情も豊かだし、性格も違う。

シャンハイは人懐っこい。ホウライは人見知り。

こういうのは失礼かもしれないが、よく出来ている。

可愛いね。俺はシャンハイとその後に隠れているホウライを撫でてあげた。

「シャンハイ♪」 「ホウライ……………」

気持ちよさそうに目を細めてくれた。

良かった良かった。

「珍しいわね。シャンハイはともかく、ホウライが初見の人に懐くなんて」  
「やっぱり人見知りなのか。」

その後少し雑談した後、俺は帰路に着いた。

迷ったせいで思った以上に時間が経ってしまったな。

チルノ達がお腹を空かせてそうだ。

まあお土産を出せばなんとかなる。

今回のお土産は少女……アリスちゃんに食べられるキノコを貰った。

これは今日の晩御飯だな。